

International Pragmatics

Association 2007 by Debra

J. Occhi

第 10 回 International Pragmatics Association Conference が 2007 年 7 月 8 日から 13 日にスウェーデンのヨーテボリで行われました。大人数の参加にもかかわらず、二人の Donna を初めとする日本の語用論研究者たちに当てないで投げキッスをすることはできないぐらいでした。日本語についての全ての発表に出席することは不可でした。ここにいくつかご紹介し

ます。

Ruth Wodak, “Bridging the Gap between Macro- and Micro-Analysis: The Everyday lives of Members of the European Parliament [マクロ分析とマイクロ分析の橋渡し: ヨーロッパ議会議員の日常]” Ruth は常に卓越した研究をする! EU の多額の補助金をもって、時間に追われている議員にしきりに密着し、物事が実際にはいかに行われ、また、行われぬのかを取材した。民俗学的に表舞台と裏舞台でのディスコースを収集し、政治的決定における貴重な見識を提供した。

Luisa Martin Rojo, “How to approach the construction of inequality in Multilingual Classrooms? [多言語クラスにおける不平等の構造への取り組み]” スペインのミドルスクールでの興味深く、もの悲しいビデオをかいま見て、先生・生徒間のインターアクションで特別扱いがいかにかに反響し、植えつけられ、否定されるかを示した。先生による母語話者との位置づけが、流暢に話せない生徒の逃げの戦略と

もに、胸につかえるような考えさせる内容だった。

Susan Ehrlich, “Legal Discourse and entextualization practices [リーガルディスコースと entextualization の実際]” entextualization (à la Bauman & Briggs)があるレープ裁判の陳述を例に取り、スピーチデータに適用されるかの重大な例示である。全く異なった解釈がどのように証言され、様々な改作を通して法廷で進化するかを示しました。身の毛のよだつような内容である。

William O. Beeman, “Emotion and Instantaneous Choice in Interactional Linguistic Pragmatics: Cross-Cultural Perspectives [相互作用言語学語用論における感情と即断: 比較文化的見解]” ドイツ語、英語、ペルシャ語、ジャワ語と、少し日本語について触れていたが、言語学と他の人文科学との異なる学問体系にまたがる研究の増加を述べていた。特に母語話者が敬意レベルや会話系統をとっさに判断するメカニズムが感情的な返答を制御するのとおなじメカニズムによって潜在的に制御されることを論じていた。

第 11 回 International Pragmatics Association Conference は 2009 年 7 月 12 日から 17 日にオーストラリアのブリスベンで開催される予定です。IPrA のホームページ <http://ipra.ua.ac.be/> で最新の情報がご覧になれます。ブリスベンでお会いしましょう!?